五行歌

秋山昭子

（藤沢日曜歌会）

吾亦紅を
一輪さして
秋を恋う
目立たぬ花が
和室に映えて

浅野征子

（藤沢火曜歌会）

ふる里の
駅におりたつと
香りの記憶 よみがえる
ふぅーっと 一つ深呼吸
この空気感が すき

新井奈々草

（藤沢日曜歌会）

幼なじみと
ふる里を歩けば
懐かしいワードが
湧き出し
海馬が走り出す

飯田敏一

（藤沢火曜歌会）

収穫の秋がまたやってきた
むせるような稲の匂い
刈り取った後は
はざかけに干す
暮れにはこの米で餅をつく

石川トシ

（藤沢日曜歌会）

他人（ひと）に聞かせても
しようもない昔の話
一つ二つ
手繰り寄せて
私を寝かせる子守唄

石松いさを

（藤沢日曜歌会）

庭の雑草が
しっかり増えてきたが
露草も元気に咲いて
「こんにちは」と
存在を誇張している

いわきやすお

（藤沢火曜歌会）

固形洗濯石鹸を買った
置き去りにされない
物への愛しさ
豊かではなかったが
楽しかった時代を偲ぶ

牛島芳一

（藤沢火曜歌会）

夢を乗せているようで
儚い…しゃぼん玉
物には必ず終わりが…
という
安心感も乗せて

遠藤由里

（藤沢日曜歌会）

人の心を
揺さぶるのは
百の言葉より
心からの
笑顔

緒方真子

（藤沢日曜歌会）

リュックを新調したら
両手が自由になった
それでは手でもつなごうか
ラブラブカップルみたい？
どう見ても老老介護でしょ

岡本まさ子

（藤沢日曜歌会）

教えられるでもなく
思いつきでもない
鳥たちよ
渡りは
旅なのか

小原美子

（藤沢日曜歌会）

夕陽は
富士の頂きに
赤い花を咲かせ
花びらは
やみにとけて

菊地敬子

（藤沢火曜歌会）

人が誰も通らない
日本中の田舎の道
たまに老人がトボトボと
赤ちゃん 子供を見かけない
逢ってみたい赤ちゃん 子供

黒木允

（藤沢日曜歌会）

「老いは2度ないよ」と
娘に忠告され
本腰入れ取り組む
老いにしかない
喜びや幸せ求め

桑原耐子

（藤沢日曜歌会）

秋色を
愉しむこともなく
カラカラと散る梅の葉
待ちくたびれた
秋に

志津

（藤沢日曜歌会）

振り向いても　振り向いても
いつまでも手を振っている
ありがたい
うれしい
かなしい

杉本明美

（藤沢火曜歌会）

列車に揺られ揺られて
歌を書く
普通列車は
心の揺れと同じ
心地よい

鈴木春野

（藤沢火曜歌会）

あの花に寄り
この花達には
チョット長居
四月の散歩は
ミツバチ気分

草庵

（藤沢日曜歌会）

みんな 何処へ
帰って逝くのかな
きっと
父さん母さんが待っている
お空に帰って逝くんだね

高原伸夫

（藤沢日曜歌会）

いつの間にか
読書しなくなった
本が人生の先生
無限の知恵が
汲み取れたのに

高原　美智子

（藤沢日曜歌会）

和菓子には
手の温もりが
感じられる
餅やあんこを
慈しむような

田中　きみ

（藤沢火曜歌会）

すべって
ころんで
つかんだ手
その手の人が
連れとなる

寺田　篤弘

（藤沢日曜歌会）

一日蜘蛛は
動かない
餌を待つ緊張感で
こんな思いで　私は
待つものがあるのだろうか

西田　明子

（藤沢火曜歌会）

ＡＩが進歩し
諸事に処してくれて
便利にはなったが
人間の頭脳が
退化していかないか不安

橋本圭子

（藤沢日曜歌会）

正面に入道雲
頭上には筋雲
その上は
彼方まで青空
北国の秋空は限りなく高い

蓮村詳子

（藤沢火曜歌会）

妹が誕生して
退院する日
病院での会計を見ていた
二歳の姉　ある日突然
「又赤ちゃん買いに行こ！」

ひろこ

（藤沢日曜歌会）

蒼天に
布団を干して
伸びをして
カレー香来る
文化の日

細谷修一

（藤沢火曜歌会）

風雪に耐え
微動だにしない
富士山
内に情熱を秘め
孤高を保つ

松岡雅子

（藤沢日曜歌会）

結い上げて
もらったばかりの
三つ編みを
くるんと回して
初夏(はつなつ)よ

松本希雲

（藤沢日曜歌会）

原爆後行方不明の
小学校の友に
一目でも会いたい
まだあなたは
生きていますか

茂木知恵子

（藤沢日曜歌会）

光があれば前に後ろに
左右に纏わり付き
ついて来る
掴もうにも掴めない
影よ　お前は何者なんだ

山口博子

（藤沢火曜歌会）

ちょいと見栄張ったり
ちょこっと嘘ついたり
時々は反省したり
そんなこんなで人生
過ぎて行くんだなぁ

横山礼子

（藤沢日曜歌会）

「がんばったね！」の
ごほうびシール
5才からもらう
ナイショね…と
もう一枚　嬉しい